

## ■ 2016年マリン関連ニュースリスト「MJCマリン十大ニュース」

No.	日付	テーマ	内容
1	1月1日	三陸の水産加工品 統一ブランドに	東日本大震災で被災した三陸地域の水産加工品を国内外に売り込む広域連携組織「三陸地域水産加工業振興推進協議会」が、東北の官民などによって設立された。世界三大漁場の多様な魚種を生かし、世界に通用する統一ブランドを構築し、回復途上にある被災地の販路拡大を目指す。1回目の協議会が4月に、東北復興水産加工品展示商談会が6月に開催された。今後、広域連携による取り組みを国内外に発信するためのPRサイトの開設やメールマガジンなどで情報提供していく予定。
2	1月21日	9マリーナが加盟するジャパンマリーナアライアンスが発足	1月21日、兵庫県・新西宮ヨットハーバーにて、同ハーバーのほか8マリーナ（北海道・小樽港マリーナ、神奈川県・横浜ベイサイドマリーナ、愛知県・ラグナマリーナ、大阪府・いずみさの閑空マリーナ、広島県・広島観音マリーナ、福岡県・西福岡マリーナ マリノア、長崎県・長崎サンセットマリーナ、沖縄県・宜野湾港マリーナ）の運営会社の代表が集まり、ジャパンマリーナアライアンスの設立総会を開催、同アライアンスが発足した。同アライアンスの設立目的は、加盟9マリーナが互いに連携し、ネットワークを構築することで、各マリーナの利用者により充実したサービスを提供すること。各マリーナ周辺の海の魅力を伝えるとともに、遠隔地でのボートイングを楽しむ際のサポート体制を高めていく。
3	2月4日	放流イセエビの成長確認世界初か、安定漁獲に展望	イセエビの人工飼育に国内で唯一取り組む「三重県水産研究所」（同県志摩市）で、人工ふ化し同市沖に試験放流された稚エビ25匹のうち、1匹が出荷できる大きさに無事成長していたことが今年2月4日にわかり、同研究所は、生態に謎の多いイセエビの安定漁獲につながる初の研究成果としている。同研究所は、人工ふ化した稚エビが自然環境に適応できたと判断し、今夏8月10日、初めて稚エビ(体長8~12cm)を放流。放流した稚エビには発信器を付け、成長に適した海域調査に乗り出す。なお、放流した稚エビの多くは、1~2年で漁獲サイズに到達する。国立研究開発法人「水産総合研究センター」（横浜市）の吉村拓グループ長は「試験放流した稚エビの成長確認は世界でも例がない。水産業界の夢が現実味を帯びてきた」と高く評価している。
4	3月3日	日本ボート・オブ・ザ・イヤー2015決定	3月3日、ジャパン インターナショナル ボートショー2016の会場内で、日本ボート・オブ・ザ・イヤー2015が決定した。同会場で行われた最終選考では、国産中型艇部門賞を受賞したヤマハ242リミテッドSと、輸入中型艇部門賞を受賞したオカザキヨットが輸入・販売するデルフィア・エスケープ1100 Sが同点になったため、7年ぶりに当日参加した21人の審査員による決選投票が行われ、デルフィア・エスケープ1100 Sが同賞を受賞した。なお、部門賞は下記の通り。 【国産】○小型艇部門：ヤマハ・ファースト23／○中型艇部門：ヤマハ242リミテッドS／○大型艇部門：ヤンマーEX38 【輸入】○小型艇：スカラブ215HOインパルス／○中型艇：デルフィア・エスケープ1100 S／○大型艇：プリンセス82MY 【PWC】○ヤマハFXクルーザーSVHO 【特別賞】○アキレスHRB-330RU
5	3月6日	「ジャパンインターナショナルボートショー2016」昨年を上回る5万人が来場	3月3~6日までの4日間、横浜・みなとみらい地区のパシフィコ横浜および横浜ベイサイドマリーナで「ジャパンインターナショナルボートショー2016」が開催された。今年は193社・団体が出展し、ボート、ヨット、水上オートバイなど233隻、マリンエンジン55基が展示された。来場者数は4万9515人で、前回（2015年）比115%増。パシフィコ横浜会場では、釣りガールによるプレゼンテーション「これが私のボートフィッシング」などを実施し、ステージでは、経済評論家でボート免許を所有しマリンレジャーを楽しんでいる勝間和代氏らによるトークショーも行われた。一方、横浜ベイサイドマリーナ会場では、全長30フィート以上の中大型艇49隻が係留展示されたほか、女性限定の「春らんまん。マリーナ・ピクニッククルーズ」を実施するなど、ボートの展示と乗船プログラムなどで来場者を楽しませた。

6	3月15日	ライフジャケット着用義務化へ、 国交省・水産庁合同会議で合意	国土交通省と水産庁は3月15日、「小型船舶安全対策検討委員会」と「ライフジャケットの着用推進等に関する会議」の第1回合同会議を開催し、漁船やプレジャーボートなどの小型船舶からの海中転落による海難事故対策として、小型船舶の暴露甲板上でのライフジャケット着用の完全義務化を進めることで合意した。5月中旬～6月中旬にかけパブリックコメントを募集し、当初は7月下旬に省令を改正・公布し、1年の猶予期間を設けたのち来年夏の施行を目指していたが、調整が難航し、省令の改正・公布は2016年12月下旬となる見込み。なお、ライフジャケットの着用については、平成15年6月から水上オートバイの乗船者と、12歳未満の小児で、平成20年4月から1人乗り小型漁船（総トン数20トン未満）で漁労に従事する者に義務付けられており、それ以外の場合は努力義務となっていた。
7	4月1日	BAN、サービスエリアをエリア拡大	プレジャーボート向けの会員制レスキューサービスを提供する、日本海洋レジャー安全・振興協会のBAN（ボート・アシスタンス・ネットワーク）が、瀬戸内海において、サービスエリアを拡大した。従来は、兵庫・岡山両県境と徳島・香川両県境とを結ぶ線から、広島県・安芸津港と愛媛県・菊間港を結んだ線までだったが、今回のエリア拡大により、瀬戸内海全域をカバー。これにより、会員であれば、房総半島南端と伊豆諸島北部（伊豆大島から神津島まで）から、関門海峡および佐多岬と関崎を結ぶ線までの全エリアでサービスを受けることが可能となった。
8	4月28日	ヤマハセーリングチーム結成	ヤマハ発動機は、インターナショナルクラスのヨット「470級」のセーリングチーム「Rev's YAMAHA Sailing Team（レヴズ ヤマハ セーリング チーム）」を結成した。同社のチームの結成は10年ぶりで、今後開催される国内主要レースに参戦、国際レースへの出場、2018年の世界ランキング20位以内、20年の世界選手権優勝を目指す。また、チーム結成に合わせてスペシャル・コンペティション仕様の470級ヨットを開発し、同セーリングチームのほか、有力選手に供給する。
9	6月4日	マリナーニバル2016、ファミリーで楽しめるマリレジャーの魅力を紹介	「マリナーニバル2016 in アーバンドックららぽーと豊洲（主催・日本マリナー事業協会）」が、6月4、5日に、アーバンドックららぽーと豊洲（東京都江東区）で開催された。今回で2度目の開催となる同イベントは、マリレジャーの裾野を広げることを目的に開催。運河に面したショッピングセンター内のシーサイドデッキには、スズキ、ホンダ、ヤマハ発動機など12の企業や団体からボートや水上オートバイ、船外機などが展示された。このほか参加型のプログラムとして、投げ釣り王選手権や特設プールを使用したカヌー体験、ボートのオモシロ科学教室など親子で楽しめるプログラムを実施し、ショッピングセンターの利用客も多く訪れ、終日賑わった。なかでも注目を集めたのは、体験クルーズ。全長10mクラスの大型クルーザー3隻で、約45分のクルージングが楽しめるというもので、有料にもかかわらず、イベント開始から申し込みの列ができるほどの人気だった。
10	6月22日	戦艦大和を呉市が調査。デジタル映像を公開	太平洋戦争末期、乗組員約3千人とともに東シナ海に沈んだ戦艦〈大和（やまと）〉の潜水調査に、広島県呉市が行政機関として初めて成功し、6月22日、そのデジタル映像や写真が報道機関に公開された。艦首にある菊の紋章も鮮明に浮かび上がった。当時の最先端技術の集大成でありながら、呉海軍工廠で極秘裏に建造された戦艦〈大和〉は、昭和16年（1941年）12月に就役した世界最大の戦艦。大和の建造技術は、世界一の大型タンカー建造だけにとどまらず、自動車や家電品の生産など幅広い分野で応用され、戦後の日本の復興を支えてきたと言われている。

11	6月25日	瀬戸内国際芸術祭に合わせて、クルージングインフォメーションデスクを設置	日本マリン事業協会四国支部では、6月25日～9月4日、9月24日～11月6日の期間中、「プレジャーボートで行く瀬戸内国際芸術祭の旅 クルージングデスク」を開設した。瀬戸内国際芸術祭は、香川県の島しょ部を中心に開催される現代アートのトリエンナーレ（3年に一度開催される国際美術展覧会）。複数の島が会場となる同芸術祭を巡るには、既存のフェリーなどだけでは効率が悪いこともあり、それを補完するべく、海上タクシーやプレジャーボートの利用を推進する係留場所が用意された。クルージングデスクでは、同芸術祭の夏・秋会期に合わせて設置されたもので、芸術祭会場である島の係留場所や推奨ルートなどを案内した。
12	6月26日	快挙、岡田・木村、金メダル獲得！ドイツ470級ジュニア世界選手	ドイツ、キールにて6月20～26日に開催された470級ジュニア世界選手権で、岡田奎樹/木村直矢が金メダル、高山大智/高柳彬が銅メダルを獲得した。2020年東京オリンピック控え、日本の470界に明るいニュースとなった。
13	6月30日	LEDでマコガレイ成長	北里大学海洋生命科学部（神奈川県相模原市）は6月20日、緑色LED（発光ダイオード）の光をマコガレイの稚魚に照射すると、通常の飼育と比べて成長を早める効果があることを実証し、発表した。これは、同大の「魚類分子内分分泌学研究室」（高橋明義教授/水澤寛太准教授）が主となり進めている研究で、LED光によって魚の成長促進効果を実証するというもの。同研究室では2009年頃から試験を重ね、緑色のLED光を照射すると、ヒラメやホシガレイで通常より成長が促進されることがこれまでに確認されていた。この結果を受け、今回、県水産技術センター、スタンレー電気の協力を得て、マコガレイに適用し、全長27ミリのマコガレイ稚魚に緑色LED光を4週間、照射したところ、通常の方法と比べて、体長で1.2倍、体重で1.4倍成長が早いことが明らかとなった。マコガレイは底びき網やさし網で漁獲される東京湾の主要魚種のひとつだが、近年資源が減少し漁獲量が低迷している。そのため、県では稚魚放流など「つくり育てる漁業」を推進してきたが、マコガレイは成長が遅く、ヒラメと比べた場合でも、同じ大きさに育てるのに2倍もの日数を要するといった課題がある。水産技術センターでは、今回の緑色LED光による成長促進効果を最大限に活用できる飼育条件などの解明に向けて関係機関と共同研究を進め、江戸前のマコガレイ資源の早期回復を目指すという。
14	7月1日	プレジャーボートの発航前検査、見張りの実施の義務違反が処分対象に	酒酔い等操縦の禁止、危険操縦の禁止などを定めた「小型船舶操縦者法に基づく遵守事項」の一部が改正され、7月1日から、「発航前の検査義務違反」と、「見張りの実施義務違反」が処分の対象となった。これらはともに、小型船舶による海難事故の原因として、機関故障や衝突が多いことからとられた措置。見張りの実施義務違反では3点（他人を死傷させた場合6点）、発航前の検査義務違反では2点（同5点）が課されることとなり、過去1年間の違反累積点数が一定以上に達すると行政処分（1～6カ月の業務停止）が下される。
15	7月10日	沖縄本島東海岸に与那原マリナーがオープン	7月10日、沖縄県・与那原町の東浜に、「与那原マリナー」がオープンし、使用申請の受け付けを開始した。県が設置する公営マリナーとしては、宜野湾港マリナーに続く二つ目。海上には30～70フィートの中・大型艇バースを66隻分、陸上には30フィートクラスまでの小型艇ヤードが132隻分、ディンギヤード30隻分、PWC50隻分を確保。加えて、100フィートの大型艇にも対応できるゲストバースを備えている。8月20、21日には、市民を招いての盛大な供用開始式とオープニングイベントが開催された。このマリナーは、県が進める沖縄本島東海岸エリアの振興策「マリンタウンプロジェクト」の一環として設置されたもので、2015年には隣接エリアに西日本最大級のビジネスイベント施設の建設も決定。本州側からアクセスしやすい東海岸に大型マリナーが完成したことで、マリンレジャー拠点が西海岸に集中していた状況に一石を投じる施設として期待されている。

16	7月14日	富山県新湊マリーナで大型艇用を含む新設バースの供用を開始	富山県射水市の富山県新湊マリーナでは、7月14日より、新たに37隻分の係留バースの供用を開始した。新設バースは、15メートルクラス9隻分、12メートルクラス7隻分、10メートルクラス21隻分で、中でも15メートルクラスのバースは、日本海側のマリーナとしては初となるシングルバース仕様。係留バース全体の収容隻数は185隻分となった。また、10メートルクラス57隻分を含むヤードスペースの増設も行われており、2016年度末までには陸上収容隻数が521隻分となる予定で、陸上艇置スペースとしては全国最大規模となる。同時に、クラブハウスの建て替えや、大型艇対応クレーンの設置、バーベキューエリアの整備なども進められている。2014年10月に富山湾が「世界で最も美しい湾クラブ」に加盟し、2015年3月には北陸新幹線が開業、高速道路網の整備も進んだことなどから、県では観光誘致を積極的に推進中。同マリーナも、大規模整備を実施することで、首都圏を含む他のエリアからプレジャーボートユーザーを誘致したい考え。
17	7月20日	“味はウナギ”。「近大ナマズ」のかば焼き、イオンで販売	近畿大学は7月20日、同大・農学部水産学科が鹿児島県の「牧原養鰻」と協力して開発した、ウナギの味に似た「近大ナマズ」のかば焼きを、イオンが取り扱うことを発表した。「近大ナマズ」は、数年がかりで開発した独自配合の餌を与えて井戸水で育て、特有の臭いを抑えたもの。2015年には奈良県のウナギ料理店で試験的に提供され、予想以上の反響を得ており、絶滅が危惧されているニホンウナギの代用としても注目が集まっている。2016年は、脂の乗りをよくして風味を高めており、計7千食ほどを、7月30日の土用の丑（うし）の日に向けて、23日から順次、イオンの一部店舗で販売する。このナマズの小売店での販売は初めて。牧原養鰻が設立した新会社「日本なまず生産」では、他のスーパーや百貨店を含め、4～8月で1万数千尾を出荷する計画。刺身や天ぷらといったメニューの開発を進め、通年での販売も目指す。
18	7月18日	大阪中央卸売市場前港の「海の駅」、2017年3月オープンを発表	区内にある大阪市中央卸売市場前港を「海の駅」にする計画を進行中の大阪市福島区では、7月18日に毎年恒例の「ふくしま水辺フェス2016」を開催。その中で、2017年3月の「海の駅」開設に向けて、水上レストランやキャンプスペース、ゲストハウスを設置することを発表した。同所は、安治川にかかる船津橋の下流東岸に位置しており、大阪湾からのアクセスも、上陸後の大阪都心部へのアクセスもよく、100フィートまでのクルーザーが入港可能。区では、同所をにぎわい創出拠点として整備を進めており、海の駅開設条件の一つであるトイレも設置。本格オープンに向けて関係各所との調整を続ける。同フェスの開会式であいさつした坂本幸三区長は「官民一体となって、ここを素晴らしいステージにしたい」と意欲を見せた。
19	8月4日	東京オリンピック追加種目にサーフィン	8月3日（現地時間）にブラジル・リオデジャネイロで開催された国際オリンピック委員会（IOC）総会で、2020年東京五輪の大会組織委員会が提案していた追加種目5競技（野球／ソフトボール、空手、スケートボード、スポーツクライミング、サーフィン）の採択が正式に決定した。このうち、サーフィン会場については、12月に行われるIOC理事会にて正式に決定する見通しだが、組織委では、国際大会の開催実績もある千葉県・一宮町の九十九里浜南端、釣ヶ崎海岸の「志田下（しだした）」に絞り込んでIOCに計画を提出しており、同地が有力な会場候補となっている。

20	8月7日	千葉県銚子沖でボートが行方不明、カジキ釣り大会参加者4名	千葉県銚子市は、8月7日、銚子マリーナで開催されたカジキ釣り大会「千葉ビルフィッシュトーナメント銚子大会」に参加した同マリーナ所属のプレジャーボート〈コンチネンタル〉が行方不明になったと発表した。ボートには船長で会社役員の男性（56）ら4人が乗っていたが、連絡が取れなくなっていた。銚子海上保安部が巡視船などで捜索した結果、9～10日にかけて男性4人の遺体を発見し、いずれも〈コンチネンタル〉の乗員と確認されたと発表した。大会は、悪天候時に中止を決める基準が明確に定まっておらず、天候が悪い場合などは参加船の船長たちが集まって「船長（キャプテン）会議」を行い、開催の可否を決める。過去に台風直撃などで中止したこともあったが、今回は6日夕方の船長会議で中止を求める声は出なかったという。
21	8月9日	リオ五輪、カヌー・スラローム男子カナディアンシングルで、羽根田卓也が銅。カヌー競技でアジア人初のメダル	リオデジャネイロ・オリンピック4日目の8月9日（現地時間）、カヌー・スラローム男子カナディアンシングル決勝で、羽根田卓也（ミキハウス）が銅メダルを獲得した。カヌー競技でメダルに輝いたのは日本勢男女はもとより、アジア人としても初めて。予選を5位、準決勝を6位で通過した羽根田は、決勝で24カ所のゲートに一度も接触せずに97.44点を挙げて3位以内を守りきった。高校卒業後、単身スロバキアに渡って競技を続けた羽根田は、初出場の2008年北京五輪で14位、2012年のロンドン五輪で7位に入賞。三回目のオリンピックで悲願のメダルに輝いた。
22	8月13日	北極海に400歳のサメ。脊椎動物では最長寿	北極海などに生息するサメの仲間が400年近く長生きしていることを欧米の研究チームが初めて確認し、米科学誌『サイエンス』（電子版）で論文を発表した。カメやクジラの仲間には200年ほど生きる種がいるが、これほどの長生きは植物以外では極めて珍しく、脊椎（せきつい）動物では最長寿とみられるという。
23	8月16日	小型船衝突防ぐアプリ。国交省が普及へ向け実証実験を実施	国土交通省は、プレジャーボートなど小型船の衝突事故防止のため、位置情報機能を使って船同士の接近を警報で知らせるスマートフォン（スマホ）のアプリ普及を推進することを決めた。秋以降の実証実験を踏まえて、アプリを提供する民間企業向けの指針を作り、2018年度から運用を始める方針。国交省によると、2015年には2,137隻の船舶事故があり、その75%を小型船が占めている。大型船には、他船との衝突を回避するために、自船の位置情報を発信する「船舶自動識別装置（AIS）」の設置が義務付けられているが、小型船に義務はなく、装置が高額なため普及していない。アプリは、全地球測位システム（GPS）で確認した位置情報を発信し、基地局経由で周辺のスマホ画面に表示する仕組みで、船同士が接近する、あるいは危険海域に接近すると警報やメッセージで危険を知らせるもの。市販のスマホを利用でき、費用負担が少ないのが利点。国交省は、何メートルまで接近したら警告するか、通信エリア外ではどう対応するかなどを実証実験で確認し、各社のアプリが共通で備えるべき機能を来年3月までに指針としてまとめる。企業側はアプリ使用料のほか、有料の追加情報サービスなどで収益が見込めるという。12月14～16日には、JCI（日本小型船舶検査機構）と東京海洋大学の船舶を用いて、各アプリの海上実験を実施する。
24	8月19日	オリンピック女子470級の吉田 愛／吉岡美帆、メダル届かず5位	リオデジャネイロオリンピックのセーリング競技で女子470級に出場した吉田愛／吉岡美帆（ベネッセ）は5位に終わり、惜しくもメダル獲得はならなかった。16日の第8～10レース終了時点で5位につけ、この日の最終レースに臨んだが7位。トータル66ポイントで結果は5位。アトランタ五輪の重由美子／木下アリーシア以来となるメダル獲得はならなかった。日本のセーリング競技はこの5位が最高。レーザー、レーザーレジアル、49er、49FX、RS:Xの成績はふるわなかった。

25	8月28日	カブトガニ500匹大量死。猛暑による海水温上昇が原因か？	環境省が絶滅危惧種に指定するカブトガニが、国内有数の生息地の北九州市・曽根干潟で大量死していることが確認された。日本カブトガニを守る会福岡支部によると、1月1日～8月25日の間に干潟の沿岸で見つかった死骸は約500匹。死骸の数は6月ごろから急増し、成体になる以前の個体も含まれていた。発見される死骸の数は例年、年間50～60匹ということで、2016年は約8カ月だけでこの数の8倍を超えたことになり、同会による20年間の調査で最も多い。専門家は猛暑による海水温の上昇などを原因の可能性として指摘している。
26	8月31日	防衛省、新型潜水艦を建造へ。建造費760億円	8月31日、防衛省は、2017年度予算の概算要求を、過去最大となる5兆1685億円（16年度当初予算比2.3%増）とすることを決定した。米軍再編関連経費を含むほか、水中音波探知機（ソナー）の性能や静粛性を高めた新型潜水艦の建造費760億円も盛り込み、日本周辺海域での警戒監視の能力向上を目指す。
27	8月31日	シー・シェパードが高速船投入、日本の捕鯨船上回ると主張	反捕鯨団体のシー・シェパードは、8月30日（現地時間）、日本の捕鯨船の速度を上回る専用高速船〈オーシャン・ウォリアー〉を投入して、11回目の「クジラ保護運動」を展開すると発表した。〈オーシャン・ウォリアー〉は、全長54メートル、排水量439トン、速度は25ノット以上。甲板からは小型船舶を発進させることや、ヘリコプターを運用することも可能で、遠隔操作可能な放水銃などの装備も強化している。日本の捕鯨船は最高速度22ノットと推定され、シー・シェパードがこれまで使っていた船は15ノットだった。なお、8月23日には、米連邦地裁での調停により、アメリカのシー・シェパードに対して、日本鯨類研究所が和解金を支払うことで、日本側の調査船に対する妨害行為を永久に行わないことなどを柱とする合意に達していた。しかし、オーストラリアやヨーロッパを拠点とするグループが組織するシー・シェパード・グローバルでは、アメリカでの合意は他国には法的な効力が及ばないとして、妨害行為を継続することを表明。〈オーシャン・ウォリアー〉は、シー・シェパード・グローバルが、イギリス、オランダ、スウェーデンの宝くじ団体から830万ユーロ（約9億5,000万円）の支援を受けて建造したもので、妨害活動の計画も同組織が主体だとしている。オランダ・アムステルダムで建造・進水した〈オーシャン・ウォリアー〉は、11月26日にオーストラリア・メルボルンで一般公開され、12月から調査を開始する予定の日本船団の動きに合わせて、オーストラリアを出港するとしている。
28	9月1日	築地移転延期	小池百合子知事が築地市場（中央区）の豊洲市場（江東区）への移転を当面延期すると発表した。
29	9月4日	カノア五十嵐がQSで今季二度目の優勝。来季のWCT残留が確定	8月30日から9月4日にかけてスペインで開催されたQS6000「パンティン・クラシック・ガリシア・プロシリーズ2016」において、カノア五十嵐が優勝。五十嵐は一気にWQSランキングのトップに躍り出て、WCT最終戦のパイプマスタートーズの結果を待たずして来季のツアー残留が確定した。日本人の両親を持つカノア五十嵐は米国在住の18歳。昨年、米国籍選手としてWCTへの参戦を果たし、この大会からは日本国籍の選手として出場していた。
30	9月4日	第20回を迎えた「塩釜カジキ釣り大会」	宮城県塩釜では平成8年（1996年）より「塩釜カジキ釣り大会」を開催してきた。震災のあった平成23年（2011年）は、開催を断念する声もあったが、復興へ向けて元気に平常を取り戻そうと、全国のカジキ釣りファンからの支援もあり、第15回大会を開催。震災から5年が経過した平成28年（2016年）は、第20回記念大会となった。また、20回を機に「海と街と人」への感謝をテーマに『塩釜・海感謝祭』を同時開催。大会には51チーム、225名がエントリー。2日間で20本のカジキ類の釣果があった（タグ&リリース3本）。
31	9月8日	クリオネ100年ぶり新種 北海道・オホーツク海で発見	北海道蘭越町の「貝の館」の学芸員らが、9月8日までに、巻き貝の仲間で「氷の妖精」と呼ばれるクリオネ（ハダカカメガイ）の新種を、オホーツク海で発見したと発表した。クリオネの新種発見は1902年以来。これまで同一とされた北太平洋と北大西洋のクリオネが別種だったことも判明、世界で確認されたクリオネは4種となった。

32	9月8日	4年に一度の学生世界大会「2016年FISU世界大学水上スキー選手権」が日本で開催	「2016年FISU（国際大学スポーツ連盟）世界大学水上スキー選手権大会」が9月8～11日の4日間にわたり、大潟村水上スキー場（同村方口）を舞台に開かれた。大会は今回で4回目。日本での開催はこれが初めてとなる。大会には過去最多となる19カ国60人超の選手が参加。国内からは慶応、学習院など6大学8人が出場。大会の会場は、全長約2キロの専用コース。2001年にあった世界大会「ワールドゲームズ」を機に、幅72メートルの排水路が整備された。このうち約650メートルが使われる。県水上スキー連盟の杉渕正英会長によると、海拔マイナス6.45メートルの水面は防災林に囲まれ、風の影響を受けづらい。「ここで自己新記録を連発する選手が多く、国内有数の優秀なコースだ」と太鼓判を押す。
33	9月21日	セーリングワールドカップ、2017年10月から日本初開催…東京五輪に向けて世界最高レベルの選手を日本に招く	セーリングワールドカップが2017年から4年間、日本で初開催されることが9月21日に日本セーリング連盟から発表された。五輪種目でもあるセーリングの日本開催は2020年東京五輪に向けて日本セーリング連盟の河野博文会長は、「2020年に向かって世界最高レベルの選手を日本に招いて、日本選手の競争の機会を増やし、選手の強化を行う。同時にオリンピックに向けて国際的な大レースの運営の経験を積んで、競技役員育成を加速することを目標とする」と開催に意気込む。
34	9月26日	イチローの同僚がボート事故死	米大リーグでイチロー外野手が所属するマーリンズのエース右腕、ホセ・フェルナンデス投手（24）がボート事故で死亡したと、9月25日、複数の米メディアが伝えた。マーリンズは、本拠地で同日予定のプレーブス戦を中止すると発表した。米ESPN（電子版）によると、マイアミビーチ近くの海上で岩に衝突して転覆したボートが見つかり、少なくとも3人が死亡したという。
35	9月26日	東京海洋大ら、南極海で微細プラスチック片の浮遊を確認 - 全地球上が汚染	9月26日、東京海洋大学、九州大学、環境省は、南極海でマイクロプラスチックの浮遊を確認したと発表した。廃プラスチックは、漂着した海岸での紫外線や熱による劣化で次第に微細片化した後、再び海洋を漂流する。5ミリ以下の微細プラスチック片はマイクロプラスチックと呼ばれ、表面に有害物質を吸着する性質がある。誤食によってそれが海洋生物に取り込まれてしまうなど、海洋生態系への悪影響が危惧されている。これまで、マイクロプラスチックは世界各地の沿岸域や日本海などの縁辺海、太平洋や大西洋、北極海で浮遊が確認されている。今回、東京海洋大学の練習船「海鷹丸」での南極海の調査により、南極海に設定した全5測点から計44粒のプラスチック粒子が発見された。このうち38粒は南極大陸に最も近い2測点で見つかり、マイクロプラスチックの浮遊密度（深さ方向の鉛直積分値）は、最も多い測点で28万6000粒/平方キロメートルとなった。同研究グループは、「南極海でのマイクロプラスチックの発見によって、海洋プラスチック汚染が全地球上に広がっている現実を確認することができた」とコメントした。
36	10月1日	ふるさと納税で新居浜マリーナの係留料が無料に	愛媛県新居浜市では、10月1日から、ふるさと納税寄付の返礼品をリニューアルし、その一つとして、新居浜マリーナの係留料を1年間無料とする取り組みをスタートさせた。同マリーナを核としたマリパーク新居浜は、海水浴が楽しめる人工ビーチやキャンプ場、研修施設やレストランを備える複合施設で、ここを拠点として瀬戸内海でのマリレジャーを楽しんでもらおうというもの。100万円以上の寄付で15メートル栈橋（41～50フィート）、80万円以上で12メートル栈橋（31～40フィート）、50万円以上で9メートル栈橋（20～30フィート）の係留料が、それぞれ1年間（寄附を行った翌年度の4月1日から）無料となる。なお、寄附金の使途は、同市が掲げる「6つのまちづくり」目標（快適交流、環境豊和、経済活力アップ、健康福祉、教育文化、自立協働）の各事業、および、「あかがね基金」（市内の別子銅山遺構の保護基金）と「ものづくり産業振興基金」の財源の計8項目の中から、寄附者が希望する活用先を選択できる。

37	10月5日	震災後、初の東北開催「希望郷いわて国体」セーリング競技	震災後、初の東北開催となった国体セーリング競技が、10月2～5日に、岩手県宮古市で開催された。8月末の大雨による川の水の増水と高潮が重なり、震災時と同じくらい増水した海面での開催が危ぶまれたが、「広げよう 感動。伝えよう 感謝」のスローガンの下、無事に終了した。大震災の影響で壊滅的な被害を受けた東北セーリング界の復興の象徴となった。
38	10月14日	水素で走る「燃料電池船」の実証スタート 結果は安全ガイドラインに反映	国土交通省海事局は、10月14日、2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催時期を目途とした燃料電池船実用化に向け、10月上旬から小型船舶による燃料電池の実船試験を開始したと発表した。10月20日には、2015年より「スマートエネルギー都市に用いる水素燃料電池船開発」に関する共同研究を実施している東京海洋大学とNREG東芝不動産（野村不動産グループ）が、同大学の急速充電器対応型電池船（らいちょうN）に、東芝製の定置用燃料電池を追加搭載し、実運用船建造も視野に入れた海上での使用における課題抽出のための試験を開始。この〈らいちょうN〉は、日本小型船舶検査機構から水素燃料電池搭載での航行の認可を受けており、この試験で得られた成果は、同省が進めている燃料電池船の安全ガイドライン策定作業（2015年度より3年計画）に活用。このガイドラインを燃料電池船実用化の環境整備につなげ、「オリンピックレガシー」の一助となることが期待されている。なお、NREG東芝不動産は、東京都港区芝浦一丁目地区において、先端水素技術の情報発信および舟運の活性化をテーマの一つとする国家戦略特区を活用した大規模再開発の検討を行っている。
39	10月18日	国際レースが目白押し、運営スタッフは経験を積み上げる	2016年は日本国内でいくつかの国際的なヨットレースが行われた。国際モス級世界選手権大会（5月23～29日、神奈川県・葉山）、J/24世界選手権大会（9月16日～23日和歌山県・和歌山セーリングセンター）、江ノ島オリンピックウィーク（神奈川・江の島）などだが、これらは選手たちの競技の舞台という側面はもちろんのこと、レース運営側にとっても貴重なトレーニングの場となった。というのも、2020年の東京五輪を見据えて大人数が参加する国際レースの運営スキルを高めることは、日本のレーシングヨット界にとっては喫緊の課題。運営はもとより、国際的なレベルの審判、計測などのスキルを高めるには現場での実践しかない。その観点から、日本は2017～2020年にかけて、各地で20以上の国際レースの開催を予定している。日本の海はしばらくの間、学びの場として賑やかになるだろう。
40	10月18日	マイクロビーズ規制広がる 海のプラごみ、米英など禁止に	大量に海を漂い環境破壊が懸念されている微細なプラスチックごみ「マイクロプラスチック」の一種で、洗顔料などに含まれるマイクロビーズを規制する動きが国際的に広がっている。米国では2015年、製品への使用を禁じる法律が成立。英国のメイ政権も2016年9月に、来年末までに使用を禁じる方針を表明した。プラスチックごみによる海洋汚染食い止めへの第一歩だが、日本では法規制の具体的な動きはない。マイクロプラスチックは主に、ごみとして海に流れ込んだレジ袋やペットボトルなどが紫外線や波で砕かれ5ミリ以下の大きさになったもの。洗顔料などに使われるマイクロビーズは、うち1割程度と見られている。
41	10月21日	「東京湾大感謝祭」昨年を上回る9万8千人来場	“学び、体験して、味わう3日間！”と題した「第4回 東京湾大感謝祭」（国土交通省、水産庁、千葉県などが後援）が、10月21～23日に、神奈川県・横浜赤レンガ倉庫を中心に開かれた。初日には、赤レンガ倉庫のホールの一つで、東京湾再生を目的としたシンポジウムが開催され、東京湾の水質、水理、化学、生物など、さまざまな水環境の研究を紹介。2日目以降は、倉庫広場のステージを中心に、各種イベントや各出展ブースの展示で盛り上がっていた。ファミリーに好評だった各地のゆるキャラは、ふるさとの大切さをアピール。前年より1万人増の約9万8千人が来場した。2017年は、10月20日（金）～22日（日）に同会場で開催される予定。



42	10月27日	トヨタ自動車とヤンマーの業務提携により生まれた次世代船体採用の「PONAM-28V」が発売	トヨタ自動車は、ヤンマーと共同開発した「トヨタハイブリッドハル」を採用した新型ボート「PONAM-28V」を直営のトヨタマリン営業所と全国のトヨタマリン販売店50社を通じて、10月27日より発売した。トヨタ自動車とヤンマーは、3月1日、マリン事業での業務提携を発表。トヨタが従来モデルで採用していたアルミ製ハルは、熟練した加工技術が必要で、生産量に限りがあることなどから、2年前からアルミ製ハルと同等以上の剛性を持ち、生産性の高い、FRP・カーボン・アルミの複合素材による次世代ハルの開発を進めてきた。この過程で、ヤンマーが持つ高度なFRP成型技術に着目し、2015年から次世代ハルの生産技術開発を共同で進め、量産化技術の開発に業界として初めて目途が付いたとのこと。「トヨタハイブリッドハル」は、アルミハルと同等の剛性に加え、軽量、複雑な曲面形状にも対応でき、新感覚の乗り心地と高剛性・軽量化を実現するという。
43	10月31日	海運大手3社がコンテナ事業統合世界6位、売上高2兆円	海運大手の商船三井、日本郵船、川崎汽船は、10月31日、定期コンテナ船事業を統合すると発表した。貨物需要の低迷に加え、新造船増加による競争激化で市況が悪化しているため。3社は「対等の精神」で事業を統合し、コンテナの輸送能力で世界6位規模の新会社をつくり、収益力回復を狙う。新会社は2017年7月に設立する予定で、18年4月からの営業開始を目指す。売上高は単純合算で2兆円を超え、輸送能力ベースによる世界シェアの約7%を占めることになる。出資額は船舶などの現物を含めて合計で約3千億円。出資比率は日本郵船が38%、商船三井と川崎汽船が各31%となる予定だ。
44	11月1日	港則法の一部改正で「雑種船」が「汽船等」に変更	11月1日に改正港則法の一部が施行され、従来「雑種船」とされていた船舶の名称が「汽艇等」に変更され、その対象範囲が明確化された。従来の雑種船は「汽艇、はしけ及び端舟その他ろかいのみをもって運転し、又は主としてろかいをもって運転する船舶」とされており、プレジャーボートを含む汽艇（総トン数20トン未満の動力船）は、その主たる活動範囲が港内か港外かによって、雑種船か否かが判断されていた。そのため、同型船であっても、港則法に定められた「港則法適用港内で、雑種船はそれ以外の船舶の進路を避けなければならない」という避航義務が生じるか否かが船ごとに異なり、混乱の原因となっていた。新たに定められた汽艇等は、「総トン数20トン未満の汽船をいう」と定義され、その範囲を明確化。主に港外で活動する総トン数20トン未満のプレジャーボートや漁船などが港則法適用港内を航行する際には「汽艇等」となり、汽艇等以外の船舶の進路を避ける避航義務が生じることとなった。
45	11月7日	日本海難防止協会が、ミニボート利用者の実態把握のためのアンケートを開始	海上保安庁交通部安全対策課と日本海難防止協会では、ボート免許と船舶検査が不要となる「ミニボート」〔出力1.5kW未満（2馬力以下）の動力を搭載した、長さ3メートル未満（全長3.33メートル以下）のボート〕の所有者、利用者を対象としたアンケートを開始した。2003年、ボート免許制度の大幅な改正によりできたミニボートは、インターネット通販や釣具店でも購入可能で、免許も船検も不要なことから、所有者および利用者の実態を把握しにくい。一方で、近年では、海難事故に占めるミニボートの割合が高まっていることから、有効な海難防止策および安全対策を検討するための基礎的な資料を集めるべく、このアンケートを実施することとなった。
46	11月8日	世界で最も美しい湾クラブ——静岡県 駿河湾、京都府の宮津湾・伊根湾の加盟を承認	世界で最も美しい湾クラブ（The MOST BEAUTIFUL BAYS in the world）は、優れた自然景観を保全しながら、湾周辺地域の観光振興や地域経済の発展との共存を図ることを活動理念としたクラブ。1996年設立で、フランス・ヴァンヌ市に本部を置くNGO（非政府組織）。これまで日本では宮城県の松島湾（2013年10月）、富山湾（2014年10月）が加盟していたが、2016年11月、静岡県の駿河湾、京都府の宮津湾・伊根湾の加盟が認められた。これにより、現在加盟している湾は、世界25か国、41湾となった。

47	11月18日	アメリカズカップ・ワールドシリーズ福岡大会開催	<p>2017年アメリカズカップの挑戦艇、防衛艇全6艇が競うルイヴィトン・アメリカズカップ・ワールドシリーズ（全9戦）の最終となる福岡大会が11月18～20日にかけて福岡・地行浜（じぎょうはま）で開催された。優勝したのは英国のLand Rover BAR チーム。この結果、全9戦トータルの総合優勝も同チームとなり、2017年5月に始まるLouis Vuitton America's Cup Qualifiersへ向けて2ポイントのアドバンテージを得た。日本から参加したソフトバンク・チームジャパンは福岡大会5位、総合成績も5位となった。本レースは、アメリカズカップにかかわる初の日本開催レース、元ニッポンチャレンジの早福和彦選手がチーム総監督&amp;クルーとして参加し、注目を浴びた。レース艇や乗員数、レース形式も変わり、以前のモノハルで競ったアメリカズカップ関連レースとは様相を一変しているが、セーリング界からは「興行的な要素の多いスポーツだが、それを支えるのはアメリカズカップや五輪に参加するアスリートたちで、存分にセーリングの面白さを魅せてくれた」などと評価される一方、「浜から見ていても何がなんだかかわらなかった」「セーリングが見るスポーツになるのは難しいのでは」という反応が、初めてヨットレースを間近で見た層から聞こえてもいた。</p>
48	11月29日	東京五輪のボート、カヌー・スプリントの競技会場、移転を見送り「海の森」に正式決定	<p>11月29日に行われた、2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けた東京都、政府、組織委員会、IOC（国際オリンピック委員会）の4者協議のトップ級会議で、ボート、カヌー・スプリントの競技会場を、当初の計画通り、海の森水上競技場とすることを正式決定した。一時は小池百合子東京都知事が、東京都から宮城県に競技会場を移す提案をしていたが、大会関係者からは、施設の変更はさらなるコストの増加を招くなどとして批判の声が上がっていた。また、見直しの議論を受けて、11月から中断していた建設工事が12月8日に再開し、堤防をつくるためのくいを海に打ち込むなどの作業が行われた。当初491億円と見込んでいた整備費用を、およそ200億円削減するなどして、2019年3月の完成を目指して整備が進められる。</p>
49	12月4日	白石康次郎、世界一過酷なヨットレース「ヴァンデ・グローブ」をスタートするも、無念のリタイア	<p>ヴァンデ・グローブは4年に1度開催される、単独無寄港無補給での世界1周ヨットレース。今大会は8回目で、白石康次郎はアジア人として初参戦を果たした。レースはフランスのレ・サブル・ドロヌヌをスタートし大西洋を南下、南アフリカのケープタウンを回って、南極大陸とオーストラリア大陸の間にある南氷洋を東に進む。帆船乗りの難所とされる南アメリカ大陸最南端の喜望峰を回り、大西洋を北上、赤道無風帯を通過してスタート地のレ・サブル・ドロヌヌに戻る約80日間のレース。ヨットは全長約18メートルでマストの高さは約30メートル。通常は10人ほどで操船する船を一人で操る。11月6日のスタート後、順調にレースを続けていた白石だが、12月4日にマストが折れ、レースをリタイアした。白石に怪我はなく、無事。</p> <p>以下、フェイスブックから白石さんのコメントを引用。</p> <p>■マストが折れてしまいましたが、船体も私も無事です。しかし、残念ながら、このままの状態ではレースを続けられず、リタイアせざるをえません。最後まで笑顔で行きたかったのですが、このような結果となり、応援して下さった皆様に申し訳なく思うと共に、非常に残念でなりません。今できることは、無事にケープタウンまで寄港する事で、それに全力を尽くします。</p>